

令和元年度特別展「知って！埼玉 化石でたどる2000万年」 見どころを御紹介！

半田宏伸

当館では令和元年7月6日から令和2年1月13日まで、特別展「知って！埼玉 化石でたどる2000万年」を開催しています。

本展示では、日本列島が姿を現し始める約2000万年前から、現代の生物相の基礎が出来上がる縄文時代ごろまでの生物相や、大地の成り立ちについて埼玉県から発見された化石資料を中心に紹介しています。ヒグマやサイ、トラの化石など、現在の埼玉県の生物相からは想像しにくい大型動物の化石や、当館初公開となる大型ヒゲクジラ化石など、貴重な資料も展示しています。

見どころ①

学術的に重要な埼玉県産古脊椎動物化石

埼玉県から産出している化石の中には、標本状態や産出状況などから、全国的にも貴重なものが多いです。

例えば、本展示の目玉の一つであるカワモトサイは深谷市荒川河床にある約900万年前の地層、楊井層から見つかったサイ化石です。サイ化石は日本の20地点以上で見つっていますが、多くは前期中新世のもので、カワモトサイは数少ない後期中新世のサイ化石です。さらに上顎と下顎がそろって出土しています。このような状態の頭骨化石は頭骨や歯の情報を多く残しており、当時の日本にどのようなサイが生息していたかを知る手掛かりとなる貴重な標本で、国内では他に例がありません。



カワモトサイ（個人蔵）

この他にも、当館職員らが行った研究についても標本とともに紹介しています。

埼玉県を代表する化石の一つに、狭山市笹井から見つかったアケボノゾウ狭山標本があります。アケボノゾウは約250万年前から約120万年前まで生息していた日本の化石固有種です。県内からは入間川周辺の仏子層から、いくつかの化石や足跡が発見されています。狭山標本はその一つで、国内で9標本ある全身骨格標本のうちの一つでもあります。本展示では、その狭山標本と他の標本、現生のゾウ類を比較して、狭山標本の個体の年齢や雌雄の推定、他のゾウ類に比べアケボノゾウが小型化する要因を研究した内容を解説しています。



アケボノゾウ狭山標本

また、これから研究を進め、正体が明らかになっていく標本も展示しています。そのうちの一つがクマ化石です。現在、埼玉県を含む本州、四国に生息するクマはツキノワグマのみで、北海道に生息するヒグマはいません。しかし化石記録からは、かつて本州にもヒグマが生息していたことが分かっています。クマの化石は発見例が少ないため、いつどのように現在の棲み分けになったのかは明らかになっていません。

本展示では、2015年に秩父市大滝の奥秩父鍾乳洞で発見された日本で唯一のヒグマの全身骨格化石や、武甲山周辺の鍾乳洞から発見されたと伝えられるヒグマでもツキノワグマでもないと考えられるクマ頭骨化石を展示しています。

これらの化石は今後、日本のクマの進化や棲み分けなどを明らかにする重要な資料となるかもしれません。



ヒグマの全身骨格化石

見どころ②

化石でたどる埼玉の生物相の成り立ち

本展示では、埼玉産の化石を個々に紹介することはもちろん、化石からわかる埼玉県の生物相の成り立ちを「古秩父湾の時代」「ゾウの時代」「巨獣の時代」「人類がやってきた」という4つのパートに分けて解説しています。

現在の埼玉県の生物相を一言でいうと「普通」です。南北に長い本州の中央に位置し、平野部から亜高山まで幅広い環境を有し、地理的にも地形的にも日本の平均的な生物相が成り立っています。そのような「普通」が形成されていく過程では、埼玉が海だった時代、列島となった時代、大陸とつながり多くの動物たちがやってきた時代と、時代ごとに生物相は大きく変化してきました。

「古秩父湾の時代」では、当館の代表的展示のカルカロドネメガロドンやパレオパラドキシア、セイウチの仲間やチブサワラなど、当時埼玉が海であったとわかる化石を展示しています。

「ゾウの時代」「巨獣の時代」では、日本が列島となった後、幾度も大陸とつながり、その都度、動物たちが移り住んでは絶滅を繰り返してきたことを解説しています。前述のアケボノゾウがいた約250万年前から120万年前頃は長い間、大陸との接続がなかった時代です。列島に取り残された生き物たちは、断絶された環境で固有の進化を遂げました。対して、化石ゾウの一つナウマンゾウは約43万年前に大陸と列島がつながった時代にやってきました。この時には現在は絶滅しているオオツノジカやトラ、

オオカミ、現在の日本でも見られるサルやシカの仲間の祖先にあたるような生き物たちも渡ってきたと考えられています。

現在、そして過去の日本の生き物たちがいつ、どのようにして日本にやってきて繁栄または衰退していったかを標本を展示し、解説しています。

そして最後の「人類がやってきた」では、皆野町妙音寺洞穴から見つかった約1.1万年前の屈葬人骨や、現代型生物相になった縄文時代以降に絶滅したニホンオオカミ、外来生物を展示し、縄文時代以降の、人類がかかわることで起こる生物相の変化について解説しています。

特に外来生物は、人類が海を渡る手段を得たころから人の活動に伴って持ち込まれるようになりました。人を介した生物相の変化は、自然が長い年月をかけてつくりあげた生物相の変化とは比べ物にならないほど急速なものであり、既存の生物相に大きな影響を与えていると考えられています。



様々な方法で日本へ生き物がやってくるイメージ

おわりに

本展示は、埼玉で見つかった化石を中心とした資料を通して、埼玉の生物相の成り立ちや資料の重要性、埼玉の自然の魅力を知っていただきたく企画いたしました。

また、より多くの方々に埼玉県の魅力を感じていただくために、開催期間は約半年（令和元年7月6日～令和2年1月13日）を設定しております。期間中には「長瀬紅葉ライトアップ」や「県民の日イベント」・特別展関連の講演会などの催しもありますので、ぜひこの機会にお立ち寄りいただければ幸いです。

(はんだ ひろのぶ・学芸員)